優秀賞　〈高学年の部〉

五月晴れのヒーロー

福岡県　敬愛小学校　五年
安田　彩乃

　私の父は、物静かで優しい。そして父の笑顔は、雲の晴れ間にのぞく太陽のようだ。家族を包むその光は、やわらかくて温かい。いつもはのんびりしているけれど、私が困った顔をしていると、雲をふき飛ばす勢いで飛んできて、話を聞いてくれる。難しい宿題を前にして、顔がくもった兄を見ると、霧を晴らすように陽気に歌い出して、家族を笑顔にする。父には、「五月晴れ」という言葉がぴったりだ。私は父の笑顔を見ていると、どんなに不安な時でも、たちまち楽しい気分になる。でもこんなに明るい父でも、一度だけ、くもり空を晴らすのに手こずったことがある。それは母が初めて入院した時のことだ。

　私の母は体が弱くて、時々入院する。最初に入院したのは、私が一年生の時だった。母が入院すると知った時、私は驚きと悲しみで、声も出せなかった。いつもは元気な兄も、この時ばかりはだまっていた。家の中にしのび寄る黒い雲を感じて、なみだがポロポロ流れた。もし母が帰って来られなかったらどうしよう。明日から三人だけで、どうやって過ごしたらいいだろう。私の心が不安でいっぱいになったその時、父が明るく言った。

「明日から、お父さんがお母さんになる。」

私も兄も、びっくりして父を見た。父は、親指をぐっと立てて、「まかせて」のポーズでにっこり笑っている。父のおどけた笑顔を見て、私も兄も思わずふき出してしまった。さっきまでの不安な雲が、少しずつうすれていく。父の元気な様子を見ていたら、私もがんばれそうな気がしてきた。父が続けて、

「お父さんは努力の達人です。でも、上手にできるかどうかは、誰にも分かりません。」

と言った時は、少し雲行きがあやしくなってきたけれど、それでも父の言葉はたのもしかった。私はこの日の父の笑顔を、ずっと忘れないだろう。

　母がいない毎日は、何をするのも時間がかかった。洗たく物をたたむのも一苦労だ。父が上手にたためていない時、兄は不満を言った。私もそんな兄にイライラして、兄妹げんかをしたこともある。その様子を見た父が、

「ごめんごめん。修業が足りなかったね。でも将来、このシワシワのたたみ方が世界中で流行するかもしれないよ。」

と言って笑わせてくれた。父が笑うと、嵐になりそうなピリピリとした空気が、一しゅんで温かくなる。私は、雲間を照らす太陽のような父のことがますます好きになった。

　母は今、体調が落ち着いている。家族四人で過ごす毎日が、私はうれしくてたまらない。そして時々、母が入院していた日々を思い出す。どの場面でも中心にいるのは父だ。苦手な家事をがんばりながら、笑顔を絶やさずに励ましてくれた、五月晴れのヒーロー。私はこれからも、家族で過ごす毎日を大切にしていきたい。父への感謝の気持ちを忘れずに。